

日本英文学会 北海道支部

第 67 回大会プログラム

日時：令和 4 年 10 月 30 日(日)

会場：北海道大学学術交流会館（札幌市北区北 8 条西 5 丁目）

※ 新型コロナウイルスの感染状況によっては、予防対策および感染防止のため、開催形式を変更する可能性があります。その場合には、下記の北海道支部ウェブサイトにて、また支部会員の皆様にはメールにてご連絡させていただく予定です。

北海道支部ウェブサイト：<http://www.elsj.org/hokkaido/index.html>

受付開始 (9:40~) (学術交流会館第5会議室)

開会式 (10:05~) (学術交流会館第1会議室)

開会の辞 日本英文学会北海道支部支部長 上野 誠 治

理事会 (12:40~) (学術交流会館第5会議室)

<共通プログラム> (学術交流会館第1会議室)

特別講演 (10:20-11:20)

司会 北海道大学 野村 益 寛

二つの視点が重なるとき—マンガと言語の構造的類似性—

滋賀大学 出原 健 一

<文学部門> (学術交流会館第3会議室)

研究発表 (11:30-12:05)

司会 北海学園大学 上村 仁 司

“The Fisherman and His Soul”における悪徳の肯定

北海道教育大学旭川校非常勤講師 本間 里 美

<休憩>

シンポジウム (13:30-16:30)

ケア文学の誕生—交差するケアと倫理と英文学—

司会・講師 北海道大学 瀬名波 栄潤

講師 法政大学 丹 治 愛

講師 酪農学園大学 金井 彩 香

講師 北海道大学大学院 白井 那 奈

コメンテータ 上智大学 小川 公 代

<語学部門> (学術交流会館第4会議室)

セミナー (11:30-12:30)

司会 旭川医科大学 三好 暢 博

Notes on Ellipsis: Syntax and Information

北海道大学 奥 聡

<休憩>

シンポジウム (13:45～16:30)

使用基盤モデルの展開—英語の現象を例に—

司会・講師	札幌学院大学	眞田 敬介
講師	慶應義塾大学	平沢 慎也
講師	旭川工業高等専門学校	水野 優子
コメンテータ	北海道大学	野村 益寛

総会・閉会式 (16:40-) (学術交流会館第3会議室)

閉会の辞	日本英文学会北海道支部副支部長	松井 美穂
------	-----------------	-------

<発表要旨>

<特別講演>

二つの視点が重なるとき —マンガと言語の構造的類似性—

出原 健一 (滋賀大学)

あまり一般的に知られていないが、近年、マンガに関して様々な角度から学術的研究が行われている。特に「視点」に関しては、絵で描かれるというマンガの特性のせいも、かなり精密に視点概念が提案されているが、本発表では、その一つとして、客観的な視点と主観的な視点が融合したとされる「身体離脱ショット」を紹介したのち、この概念を認知言語学的な観点から言語分析に応用する試みを行う。具体的には、出原(2021)で分析した英語の自由間接話法や日本のマンガやライトノベルによく見られる特殊なルビに加え、三人称語りのライトノベルにおいて語り手と登場人物の視点が融合していると解釈できる自由間接話法的表現に出てくる「のだ」と「と」を主に取り上げ、「語り」の視点構造においてマンガと小説にかなり類似性があることを示す。

<文学部門：研究発表>

“The Fisherman and His Soul”における悪徳の肯定

本間 里美 (北海道教育大学旭川校 非常勤講師)

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の童話「漁師とその魂」(“The Fisherman and His Soul,” 1891)は、悪徳や不道徳が賛美される物語であることを明らかにする。「漁師とその魂」では物語を通して、“the power of the love”が強調されているため、漁師の人魚への愛の強さや尊さが語られているように見える。しかしながら、漁師は人魚を愛するため、そして切り離れた肉体と魂を再統一するために、肉体も魂も様々な罪を犯し、ヴィクトリア朝の価値観に反する不道徳な行為を行う。そしてそれらの罪や不道徳な行為は、物語の最後に、神の祝福を表すと考えられる美しい花が咲くことによってすべて肯定されている。漁師の人魚への愛の賛美という仮面の下で、この童話がいかにヴィクトリア朝の道徳観に反抗し、悪徳を肯定していると言えるのか、「悪魔と魔女が揺るがす規範」、「犠牲者が人魚でなければならない理由」、「芸術家としての魂」という観点から「漁師とその魂」を考察する。

<文学部門：シンポジウム>

ケア文学の誕生

—交差するケアと倫理と英文学—

司会・講師	瀬名波 栄潤（北海道大学）
講師	丹治 愛（法政大学）
講師	金井 彩香（酪農学園大学）
講師	白井 那奈（北海道大学大学院）
コメンテータ	小川 公代（上智大学）

『ケアの倫理とエンパワメント』の著者小川公代氏をコメンテータに招き、4名の講師とともに、「ケア文学」について討論する。「ケア」は、アメリカの心理学者キャロル・ギリガンが1982年に『もうひとつの声』を発表して以来、様々な学術界で横断的な議論を巻き起こしてきた。そして去年、小川氏が同書を発表すると、ケアと倫理と文学についての議論が日本でも本格的に始まる。だが、「ケア文学」の概念は未だ定着しておらず、その議論は始まったばかりと言ってよい。「ケア文学」とは何なのか。その正体を探りたい。

シンポジウムでは、まず冒頭、小川氏が著書とその反響を紹介する。続いて、以下の4名の講師がそれぞれのケア文学論を披露し、その後小川氏と簡単な意見交換を行う。全員が発表を終えると、今度は全体での討論へと移行する。5名の登壇者と会場からの意見を交え、新たな文学ジャンルの誕生をホリスティックに検証したい。

ケア文学のルーツ

—『ゴブリン・マーケット』再読とクリスティナ・ロセッティの再評価—

瀬名波 栄潤（北海道大学）

ケア文学を「医療的な介護・看護（・治療）を描いた作品」と定義すると、英文学での始まりはクリスティナ・ロセッティ（1830-1894）の『ゴブリン・マーケット』（1862）が適切だと思う。小鬼たちの暴力的な振る舞いを描いた本作品は、ロセッティの代表作と言われながらも、奇妙でグロテスクな内容故に、発表当時から批評家たちの関心と同時に困惑を生んだ。兄ダンテやラファエル前派との関係や、敬虔なクリスチャンとしての活動などが注目され、文学的には児童文学作家としての地位に甘んじてきたのはそのためだろう。結果、帝国主義・植民地批評、フェミニズム、レズビアニズムによる再評価まではしばらく待たねばならなかった。そして今、「ケア文学」の誕生によって、ロセッティの本領が発揮される。

本発表では、ロセッティが敬愛したフローレンス・ナイティンゲールの影響を勘案しながら、詩人と作品をケア文学史の道標の一つとして位置付けたい。

『ダロウェイ夫人』とケアの倫理

丹治 愛 (法政大学)

わたしが小川公代さんの『ケアの倫理とエンパワメント』を読んでもっとも興味を覚えたのは、ケアの倫理が「自立する個」を基準とする近代社会の理念にかわって、より緩やかな輪郭をもつ「多孔的な自己」を前提とするものとして、個人観や自己観と関わる問題であるということである。ケアの倫理が内包する個人観・自己観はたしかにヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』にも存在している。しかも、『ダロウェイ夫人』はセプティマスという戦争神経症に苦しむ患者と、彼を救うのに失敗した医師たちの関係を描く小説でもある。

それとは別に、ここ数年『ダロウェイ夫人』のエンディングについて書いてみたいと思っていた。ケアの倫理と関わるかそうでないかいまのところわからないが、個人観や自己観という点では重なるし、小川さんの「ネガティブ・ケイパビリティ」論とも重なっている。というわけで、とりあえずは自分の『ダロウェイ夫人』論をまとめて、それがどうケアの倫理という問題と関わるのか関わらないのかは、シンポジウムをとおして学習していきたいと思っている。

誰かをケアする

—ドリス・レスリングのケアの精神と『よき隣人の日記』—

金井 彩香 (酪農学園大学)

ドリス・レスリングの『よき隣人の日記』(*The Diary of A Good Neighbour*, 1983) は、ケアし、ケアされる柔軟で共感的な人のつながりを描く。主人公は、偶然出会った老女にたいし、あいまいな関係性と対等さを保ちながら身体的ケアを続ける。小川公代氏は『ケアの倫理とエンパワメント』のなかで、ヴァージニア・ウルフが説明する「横臥者

(病人)」と「直立人(看護者)」を「人間の序列関係を表す究極の^{メタファー}隠喩」として着目する。この小説に描かれる横臥者と直立人双方を包容する無条件のケアのあり方は、まさにこの序列関係の「解体」を目指すものであり、1980年代以降の社会全体的な活動を含む広範な意味での「ケア」にもとづく関係性のあり方と重なる。それはまた、レスリングの反人種差別主義やフェミニズム思想に一貫してみられる人類全体への深い思いやり—ケアの精神—につながるものといえよう。

J. M. クッツェー『鉄の時代』における「ケア」の衝突

白井 那奈（北海道大学大学院）

J. M. クッツェー (J. M. Coetzee, 1941-) の『鉄の時代』 (*Age of Iron*, 1990) は、ケアの可能性と実践の困難を描く書簡体小説である。1980年代の南アフリカ共和国ケープタウンにおいて、引退した大学教師のE・カレンは、家に出入りする浮浪者・使用人とその息子・友人らとの関係を通して「慈善」と「ケア」について思考する。しかし、相互的ケアに基づくオルタナティブな家族の形成を模索しながらも支配的な位置に属するカレンは、慈善とケアを混同させ、それらの実践に繰り返し失敗する。本発表では、圧倒的かつ暴力的な非対称性のなかでケアが破綻することによって浮かび上がる、本作品に特殊なケア関係や場所性について、ジョアン・C・トロントらが提唱するケア概念を軸として考察する。カレンの末期がんによる痛みと蓄積した恥との葛藤のプロセスでもある『鉄の時代』における、独特な「ケア文学性」を検討したい。

<語学部門：セミナー>

Notes on Ellipsis: Syntax and Information

Satoshi Oku (Hokkaido University)

A simple comparison between Japanese and English tells us that Argument Ellipsis (AE) is syntactically constrained: even when the identity of the subject or the object is clear from the context (i.e., the recoverability condition is met), the subject or the object of a tensed clause cannot be elided in English, while they can in Japanese.

- (1) Did John eat the pizza? Yes, he ate it / *Yes, [e] ate [e].
(2) Taro-wa sono pizza-o tabe-ta no? Hai, [e] [e] tabe-ta yo.
Taro-Top that pizza-Acc eat-Past Q yes eat-Past Prt

However, it has been known (e.g., Oku 2016) that some information-related conditions also must be at work and AE ellipsis in Japanese makes the sentence degraded.

- (3) Taro-wa nani-o tabe-ta no?
Taro-Top what-Acc eat-Past Q
Bill-wa [e] tabe-ta no? (*[e] = nani-o)
Bill-Top eat-Past Q

Also, it is a locus of hot debate whether adjuncts can be a target of syntactic ellipsis (Tanabe 2021, Landau 2022, Simpson 2022, etc.). In this talk, I will first review representative works on syntactic conditions on AE and then examine recent proposals about ellipsis-resistant elements (including adjuncts). I will finally explore a plausible collaboration of syntax and information conditions on ellipsis phenomena.

<語学部門：シンポジウム>

使用基盤モデルの展開 —英語の現象を例に—

司会・講師	眞田 敬介 (札幌学院大学)
講師	平沢 慎也 (慶應義塾大学)
講師	水野 優子 (旭川工業高等専門学校)
コメンテータ	野村 益寛 (北海道大学)

使用基盤モデル(usage-based model)は認知文法の創始者である Langacker (1987)に端を発する。このモデルでは、言語知識は、一般的認知能力の活用によって、実際の言語使用の場面から立ち上がっていくものと考えられる。このモデルに基づく研究成果が豊富に蓄積されているが、近年の国内の情勢を見る限り、言語知識がもつ「メンタル・コーパス」としての側面 (Taylor 2012) を重視するアプローチ (平沢 2019; 2021 など) や、認知言語学と談話機能言語学との接点を追究するアプローチ (中山・大谷 2020 など) による研究などが精力的に進められている。このシンポジウムでは、英語の慣用表現 for company、発話頭に生起する although、評言節 I must say を例に、使用基盤モデルの有効性や残る課題などを検討することで、このモデルの今後の展開を議論したい。

with NP for company と同席相手の不十分さについて

平沢 慎也 (慶應義塾大学)

英語の慣用表現 for company にはいくつかの意味・用法があるが、本発表では小説で特によく用いられる with NP for company 「NP が同席相手として存在している状態で、NP が一緒にいる状態で」というパターンについて論じる。アメリカ英語コーパス COCA のデータから、この表現の NP は (have NP for company の場合と違って) (i) 「…しか～ない」の意味の表現 (only など) を伴う傾向があること、(ii) NP が動物や無生物を指す傾向があることがわかる。これらの事実は、with NP for company が「同席相手の不十分さを伝えたい」という発話意図と結びついていることを示唆している。これと似た発話意図は「…として」の for の他の用法においても確認できる。この議論から浮かび上がってくるのは、with NP for company というフレーズがジャンルや発話意図とセットにして記憶されており、さらにはその知識が (前置詞 with や名詞 company に加え) 前置詞 for の知識の一部になっているという、言語知識の複雑で豊かな姿である。

譲歩からの変化
—話し言葉における発話頭 *although* の分析—

水野 優子 (旭川工業高等専門学校)

本発表は、発話頭に現れる *although* の談話機能を考察する。大橋 (2019) によると、「譲歩の意味を持つ語や句からの意味変化」に関しては、従来あまりまとまった研究がみられなかった。しかし近年、譲歩の意味を表す *having said that* 構文がトピックシフトを合図する談話標識としての機能を発達させたプロセス (大橋 2019) や、譲歩の意味を表す *still* が新しい行為構造における機能を発達させた過程 (岩井 2017) などが実証された。大橋 (2019) は特に、譲歩を含めた対立を表す表現において、トピックシフトマーカという談話標識機能への拡張は共通に見られるようだ、という仮説を立てている。本発表は、使用基盤モデルに基づき、*The Corpus of Contemporary American English* から収集したデータを用いて、譲歩を表す *although* にもこの拡張が見られ、トピックシフトマーカの機能があることを実証的に示すことを目的とする。

評言節 *I must say* のさらなる使用基盤分析
—映画やテレビドラマからの実例を用いて—

眞田 敬介 (札幌学院大学)

英語の評言節 *I must say* は、内田 (編) (2009)によると、「言いたくはないが、黙っているわけにはいかないという状況」や「賞賛するときに用い、本心からそう思っているので言わずにいられない」という場面で用いられる。眞田(2018; 2020)は、内田 (編) の記述を出発点とし、*I must say* の談話機能の使用基盤分析を行った。しかしそこでの分析は、主節の命題内容の精査が主となっており、前後文脈や非言語的側面 (例: 表情や音声情報) を取り入れた分析にはなっていない。ここに、*I must say* のさらなる使用基盤分析を進める余地が見出せる。こうした背景に基づき本発表では、前後文脈や非言語的側面などを含む使用場面を確認しやすい、映画やテレビドラマから集めたデータを分析対象とする。それを用いて、内田 (編) の指摘した上述の2つの場面のうちどちらでより使われやすいか、内田 (編) の指摘していない談話機能はないか、などを考察する。これにより、*I must say* の談話機能 (ひいては知識) のより豊かな記述を試みたい。